

2020年6月13日

山口西田読書会 2020年6月6日のプロトコル

佐野之人記

1. テキスト

「表現作用」「三」。第1～2段落。141頁4行目～143頁11行目まで。

2. 議論

「三」の全体を読了する予定であったが、急いでも意味がないということで、できるところまでテキストを講読しつつ、前回示した解釈案を参照した。「三」の終わりまではプロトコルの替りに参加者に今回の箇所で考えたことを書いていただくことにした。今回の担当者は井町さんであった。

内在的な統一があるから精神現象が成立している。厳密に言えば、「統一が統一自身に還ること」(142頁10行)が内在的統一であり、これは意志によってのみ可能となる、と述べられている。ここまでは一応理解できるのだが、「統一が統一自身に還る」が分からない。意志は「真に作用が作用自身を目的とする」(142頁11行)のであるから、「現在」においてしか成立しないだろうが、この時に「私」に何が起きているのか自分の言葉で説明できない。読書会の中では「自分を無にして、自分を映す」といった言葉が聞こえてきたが、これもよく分からない。おそらく同じ理由で「全然我を没し尽くして、主客合一なるところに有をみる」も分からない。

一以上が井町さんから頂いた「考えたこと」であるが、内容は重要な論点に関わる「分からないこと」であったので、対話して深めていくことにした。

佐野：「三」は第1段落で物理現象と生物学的現象と心理現象が出て来ますね。この内心理現象のみ統一が内在的とされています。実はここがもうついていけない部分を含んでいます。通常は「心理学」も科学ですから、自分の内面を外から観察するしかないはずです。想起する、というような仕方です。こういう立場では「統一が内在する」とは言われないわけです。

井町：なるほど、「心理学」は、自分の感覚、連想、思惟、意志などをすべて対象化して科学的に説明する学問だということですね。このような「心理学」の立場は「反省」ということでしょうか。

佐野：ええ。そうです。それだと「物理現象」や「生物学的現象」と同じになってしまいますね。しかし西田はそれと「心理現象」を区別しようとしています。というわけでこの「内在する」と言い得る立場はいわゆる「反省」の立場ではないのです。つまり「直観」です。テキストで「寧ろ統一が要素に先立つ」「統一なくして意識は成立しない」といわれるのは

統一を直観しているからです。そうしてこの統一の直観が「目的」の直観です。

井町：上の文の「要素」は各意識現象ということですかね。各意識現象が生じる前に、自身には「統一」が働いている、それが「統一が内在する」の意味だと思いました。そして、内在的な統一は「反省」によってではなく、「直観」によって知る（自覚？）ことができる、ということでしょうか。「直観」が何なのか分かっていませんが、一先ずそういうことだと理解しました。

佐野：ええ。もともと統一されているんですね。しかし始めはそのことが分からない。何だか分からない衝動という形をとります。それに言葉を与えることで個々の目的が成立します。分別的な意識にはそれしかできません。「水か飲みたい」だとかね。人間はこうした具体的な目的によって自己の統一を実現しているわけです。とりあえずこんな感じです。

ここから第2段落です。今言ったように、心理現象は本来統一されているのですけれど、この「内在的な統一」が本当に自覚されているか、というとそうではありませんね。我々は絶えず不統一に悩まされる。思い通りにならないからです。つまり「随意的」でない。感覚も連想も自由にならない。先程も述べましたが、我々の意識ないし自己の統一は通常、個々の目的によって成立しています。何々をする、という仕方では我々の自己は成り立っています。それがないと自己が崩壊します。どうしていいか分からない、というのを人間は恐れることからこのことは分かります。

井町：「内在的な統一」を自覚しているなら、不統一に悩まされることはなく思い通りに過ごせる。つまり自由である。しかし実際はそうではない。

佐野：ええ。

井町：ここの「自覚」を自身の「直観」によって知ること、だと解釈しましたが、どうでしょう。西田の著作に『自覚に於ける直観と反省』があることを思い出しましたが（読んだことはありません）、これは関係ないですか。

佐野：ええ。もちろんあるでしょうけれど、どういう風に関係するか、となると……。それはともかく、さしあたり我々は日常的に個々の目的を実現するという仕方では自己の統一、自分が自分である、ということを保っている、ということになります。

「我々の精神現象というのも、我に対立する第二の自然であって、我々は此客観界に於て自己の目的を実現していくのである。その中に就いて自己の要求に従える作用のみ、合目的的といひ得るであろう」とはそうしたことを言っているものと思われま。

井町：「第二の自然」、「此客観界」は究極的には自分の思い通りにならない精神現象を示し、我々はその中で個々の目的を設定し、実現することを通じて自己を保っている、ということだと思いました。

佐野：ええ。

井町：我々が日々設定、実現している目的は「反省」によって得られている、ということでしょうか。

佐野：そういうことになりますね。この立場は科学のように外から人生を眺めているので

はありませんが、「内から見る」といっても、まだ反省的なのです。

井町：また、「第二の自然」に対立する「我」とは、「真の自己」ともいえる「内在的な統一」

のことだと思います。

佐野：「対立」ではなく「対する」くらいの意味で用いられていますね。ならばそういうことだと思います。しかしここがむずかしいのです。そのような立場に如何にして人間は立ちうるのか、そうした問題が生じます。じつは「如何にして」なんてないのですが。

それはともかく、テキストを見ていきましょう。「生物現象を合目的的という意味に於ては」とは「反省」、つまり外から見る立場ですね。その限りでは「精神現象」も合目的的であるはずですが。しかしそのことが我々には自覚されない、ということになります。本来そのはずなのに思い通りにならないことによって絶えず悩まされている、統一が得られない、ということです。

「併し既に統一が内在的と考えられる精神現象に於ては、合目的的というのは統一が統一自身に還ることではなければならぬ」。

ここですね。分からないところは。すべて思い通りに行くということが実現するはずはありません。ではどういうことか。

個々の目的の実現に挫折する、個々の目的を実現するという生き方そのものに挫折するという、しかし人間はそうした生き方しかできませんから、自分の力ではどうにもならない、そうした経験と共に、元来自分を生かしていた「統一」に目覚める。この統一は神といってもよいのですが、「真の自己」といってよいものです。

どうです？分からないでしょう？「分かった」といってはいけないものですよ。とりあえずこういうことが書かれている、ということが理解できればあとは読めると思います。

井町：うーん。分からないです。分からないなりに、考えてみます。生物現象と同じように精神現象が合目的的である、といった時は精神現象を「反省」の立場から見ている、ということだと思いました。

佐野：ええ。

井町：例えば「痛み」。痛くなるつもりなんてないのに、突然頭痛が起きたりする。この「痛み」を生物現象と同じように合目的的である、ということが出来る。この場合、私の精神現象であるにも関わらず、私には理解し得ない。自分の力ではどうにもならない。

佐野：ええ。

井町：しかし「統一が内在的と考えられる精神現象」すなわち意志については、他のとらえかたもできる。つまり、「内在的な統一」に「直観」で気づけたとき（＝自覚）、「真の自己」に気づける（「統一が統一自身に還る」「統一が自己自身を客観化する」）、ということでしょうか。

佐野：「痛み」は面白い例ですね。痛みは「いのち」の側からの呼びかけと考えることができますね。不具合を知らせているわけです。これに応答せよ、と。こうした「いのち」の

呼びかけに気づいたときに、我々がもともといた所の「いのち」の領域に還って、本来の統一に還るというようにも言えるわけです。我々は絶えず迷っていますから、じつは常に「いのち」は人間の苦しみ・悲しみを通して「帰れ」と呼び掛けているのですが、我々は自分の力で病を治すことができるように勘違いしている、とも言えますね。分かりやすい話だけに、怪しいですね。ちっとも身が揺れない。どうです？

ところでこの箇所、『善の研究』で言うと、「初めて読む人」(序)は第2編「實在」を「反省」の立場で読みます。つまり心理現象を外から見る仕方を読むということです。第3編に入り、第1章で意志を心理学的に説明したのち、第2章で意志を内面から理解することを学びます。直観ですね。ここから第3章の意志の自由が問題となり、第4章で、外から原因結果を問題にする「理論的研究」と、目的を内側から見る「価値的研究」の区別が生じ、道徳(倫理学)は後者だ、という線で、その後、この目的の実現が目指されることとなります。それが第3編の終わりまで続きます。最後は、善そのものを目的にしてこれを実現せよ、という良心の声(定言命令)に従って行為せよ、真の自己を知れ、という命令のまま終わっています。そうして突然第4編宗教編が始まります。しかも「宗教とは何か」というようなものから始まるのでなしに、「宗教的要求」からいきなり始まります。自分の力ではどうにもならないことを知れ、自分の力を超えた大なる生命に生かされて生きていることを知れ、という「生命の転換」の要求の声です。私は第3編と第4編の「間」に挫折を見ます。定説ではありませんが。目下の論文の第1・2段落にはこのようなことが含まれて居ると思います。つまり、自己に挫折する(自己を無にする)ことを通じて本来の統一に還る、ということです。どうですか。分かりましたか(笑)。分かっちゃいけませんよね。そこが大事ですよ。

井町：『善の研究』はすっかり内容を忘れてしまっています…。忘れていて、全く「なるほど」となりませんが、確かに、今読んでいるところとの類似性は感じます。「自己に挫折する(自己を無にする)ことを通じて本来の統一に還る」は今後もキーワードになると思うので、この視点を忘れず、西田が何を述べているかを理解しようと思います。

佐野：はい。ありがとうございました。